フィールドラーニングとフィールドワークの差異と民俗学への応用

阿部宇洋（山形大学教育開発連携支援センター）

はじめに

フィールドラーニングという新しい学術用語が使用され、新しい地域系学生主体型授業の方法として注目されている。一方で、新しい用語の定着には時間と認知が必要である。

そこで、既存の民俗学的フィールドワークとの比較と専門教育へのスタートアップとしての教育方法として有効であるか考察する。

フィールドワーク≠フィールドラーニング

フィールドワークは幅広い学問分野で使用される調査方法の一つであり、民俗学の分野においても、資料採集の際に実施される。一方で、「フィールドラーニング」とは、教室外のフィールドでの活動を通して、自己・人間・社会・自然について思索理解を深め、得られた成果を表現できることを目的とする教養教育の体験型学習である。と定義されている (※1)。

双方、名詞に「フィールド」がつく点において、自身の拠点外での活動を意味するものの、知名度の高い「フィールドワーク」とは対象に「フィールドラーニング」は市民権を得ているとは言いがたい状況である。

『フィールドワーク：共生の森もがみ』は 2005 年度から基盤教育の科目として 12 年間使用してきた名称であり、2017 年度前期シラバス上の名称は『フィールドラーニング：共生の森もがみ』（山形から考える）と変わっていない。しかしながら、後期シラバスでは『フィールドラーニング－共生の森もがみ』（学際）への名称変更が行われた。

フィールドラーニングという名称に関しては、新しい学術用語であり知名度が低く、違いがはっきりと伝わらない状態で使用している印象があるもののその認知度を向上させる必要性があるのである。

学術用語は地域や学生にも認知されず使用されており、現地講師の方も名称が変化したことに関してフィールドワークからフィールドラーニングへ変更することはないし、活動報告会の練習においても、フィールドラーニングよりもフィールドワークと発言する学生が多いことから、フィールドラーニングの認知度をあげることが課題であろう。

では 12 年間の活動内容主軸が 2017 年度後期から変化したかというと、変わってはいない (※2)。つまり約 10 年の歳月を経て、適切な学術用語の設定ができたということになる。フィールドラーニング以前は『フィールドワーク：共生の森もがみ』のプログラム内容に対して適切な用語がなく、広義にフィールドワークを使用していた。それでも、広義的解釈であれば、フィールドワークでも問題がないのであろうが、専門的学問分野における調査方法との棲み分けがつかないという問題があった。

民俗学的フィールドワークと教養教育としてのフィールドラーニング

ここで、フィールドワークとフィールドラーニングを整理したいと思う。もちろんフィールドワークとひと言で片付けられる代物ではない。そのため、本稿では民俗学的フィールドワークとの比較になることを念頭に置いていただきたく思う。

（1）目的と方法

まず民俗学的フィールドワークの場合、図書館やインターネットで知ることのできない情報を現地で知る、民俗資料としての情報を得る為に地域に入るのが一番の目的である。小松は「民俗調査は自分の「欲望」を、さらには「民俗学的欲望」を満たす為の営みであって、ムラ人たちとの友人・友好関係は、それがどんなに素晴らしい関係に発展し

ようとも、しょせんはそのための手段にすぎない、ということである」と目的意識、問題意識、課題をもちながら実施するものであり、フィールドワークは情報取得の手段であると述べている。また、位置づけ的には「民俗学における調査も、基本的にはそうした旅の一角を占めるものである。(中略)「民俗」を「所有」するための旅が、民俗学的な旅である。(※3)」とし調査方法を大きく二類型に分けている。

それは、一つめが巡歴・移動型、もう一つが一点集中・定着型である。さらに小松は「ある民俗学者が、若いときは一点集中型の調査をしていたが、晩年は巡歴・移動型の調査を好むということもある」としあくまでも類型であること強調した。

なかでも民俗学的フィールドワークにおいて、フィールドラーニングと類似するのは一点集中型の期間を限定した地域調査のみであり、その点においてもフィールドラーニングとの違いが見えている。しかしながら、前述した民俗学的フィールドワークはあくまでも、民俗学者、もしくは民俗学という分野で専門性を高めようとするもしくは専攻する学生のみの条件であり、一般的な全学的な前提に立ったものではない。

さらにいえば、大学教育の単位認定制度の中で、単位認定のための活動時間は限られており、巡歴・移動型、定着型といった時間的、金銭的負担の大きい演習は組み込めないのが現状でないだろうか。

一方フィールドラーニングは教養教育という「教養教育の総合性と各人の独自性が問われることになる。(中略) 教養教育の総合性は、それまでの学校教育で受けてきた知識や思考、家庭や地域から学んできたすべてのスキル、思考を総動員してフィールドでの体験学習を通して、自分自身で課題を発見し探求しようとする強い意志にある。(※4)」つまり、体験を通して、課題を発見することに重心が置かれているのである。

また、フィールドラーニングの場合、時間的には１泊２日を２回、計４日設定し、最後に受け入れ先の地域の方への報告会で終了する。

民俗学的なアプローチでは、課題が先に存在し、その課題を解決するために地域へ調査に行くが、フィールドラーニングにおいては、一定地域に入ってから自ら課題を見つける必要になるという特徴が見えてきたであろう。

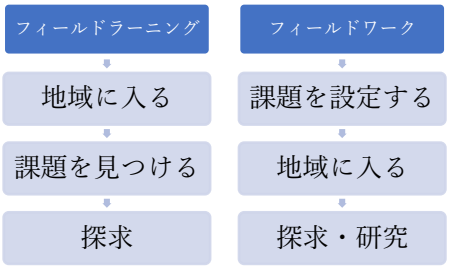

図１　過程比較図

（2）、調査対象場所と調査対象者

民俗学的フィールドワークの場合、課題を設定して調査地に入ることにより、その課題解決のための情報がある場所、話者を探す必要性が生じる。「現在では、まず最初に調査地があるのではない、ということである。民俗学という学問があり、その学問の内部における諸課題があり、その諸課題を解決するために生きている「民俗」の調査が必要になり、民俗学者は調査に出かけてゆくのである。」

話者に関しても「「民俗」を調査するためには、それを担っている人びとと接触しなければならない、ということである (※5)」と述べ、自発的な行動を伴った調査が求められとされている。

一方フィールドラーニングの場合は、プログラムによりけりではあるものの、教育委員会もしくは受け入れ団体が指定した講師が、何を伝えたいか、何を学ばせたいかを指定する。

そのため、流動的に突発的にプログラム内容が変化する場合があるものの、話者は常に担保されている。それも、フィールドラーニングの特徴的なところであると考える。

講師を地域の方にお任せしているということは学びの中心は地域と学生であり、地域は、より学生

に地域を知ってもらおうとその場でプログラムの改善を試みるのである。

例えば、プログラムに雪上ハイキングが組み込まれていたとする。本来であれば、かんじきを使用し雪上ハイキングを実施する予定であったものの、現地に行ってみると天候の関係で堅雪になっていた時があった。この場合、受け入れ側はかんじきをはかせることがメインではないためかんじきを使用せずに雪上ハイキングを実施した。

実際、堅雪をかんじきで歩いても、かんじきの効果はほとんどわからないだろう。こういった、雪を知り尽くした地元講師ならではの対処も見ることができる (※6)。

また、ちょうど、地域の民俗行事「病送り」の日と重なっていた事から、急遽病送りに参加させるといったフットワークが非常に軽いプログラム変更などもある。

しかしながら、地元で教育、地域情報をもっている方が中心となるため、民俗学的フィールドワークのように、話者を探す、話者が情報を確かにもっているかどうかという不安は払拭され教育的な効果は安定している。

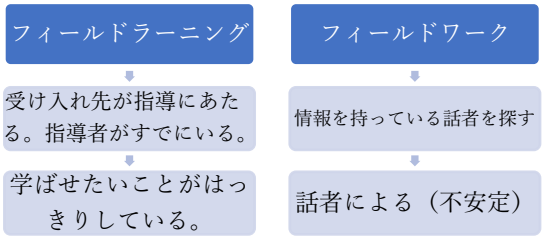

図２　情報（教育）の安定性比較

民俗学的フィールドワーク教育の問題点

「フィールドワークの実践によって、民俗誌学ともいうべき地域の民俗を総体としてえがく分野を樹立する必要性である。（中略）あくまでも現代のフィールドがおかれた状況を出発点とする民俗誌学が構築されなければならない。(※7)」とするものの、民俗学徒の教育に関しての具体的な方法は未提案であることが問題であろう。また、多くの学生が自らの課題を設定し探求した場合、様々な地域での活動が余儀なくされる。その活動も教員が引率するわけでもなく、あくまでも成果のみが評価の基準になりやすい状況にある。そのため、初年次から地域でのフィールドワークを実施することは少ないのである。

ではどのようにフィールドワーカーを育成すればよいかということに関しては、筆者は、フィールドラーニングをフィールドワークのスタートアップに使用することがベストであると考える。

今後の展開

民俗学的フィールドワークの場合はどのように研究者を育てるかということが最大の課題である。フィールドラーニングは課題発見能力，課題探求能力，プレゼンテーション能力，コミュニケーション能力，行動力，社会性の基礎的な力を身につけることである。

一見すると全く別の目標に感じるが、フィールドラーニングの目標は民俗学的フィールドワークにも内包されなければならない大切な事項である。また、課題発見能力が身についていない状態で専門的なフィールドワークに出た場合に地域に与えうる被害は大きく、大学側のリスクも大きくなる。

フィールドラーニングは民俗学的な視点で見れば、非専門的であるものの、研究者としてのスタートアッププログラムとしては非常に実行しやすいものであると考える。と同時に、民俗学徒育成の為にも実施する必要があると考える。

しかしながら、プログラムの前提になるのは地域の負担である。地域との信頼関係があっての授業形態であることを肝に銘じなければならない。

註

※１　2016「フィールドラーニングは教養教育の新しい教育方法である」『山形大学高等教育研究年報』

※２　フィールドラーニング共生の森もがみの目

標は課題発見能力，課題探求能力，プレゼンテーション能力，コミュニケーション能力，行動力，社会性の基礎的な力を身につけることである。
『山形大学シラバス 2017』参照
※3　小松和彦 1998「民俗調査の二類型」『講座日本の民俗１　民俗学の方法』
※4　小田隆治 2017「大学教育におけるフィールドラーニングとアクティブラーニング再考」『山形大学高等教育研究年報 10』下線は筆者。
※5　註 3 と同じ。下線は筆者。
※6　かんじきは柔らかな雪上を歩くための民具である。
※7　岩田重則 1998「日本民俗学の歴史と展開」『講座　日本の民俗１　民俗学の方法』

参考文献

佐藤郁哉 2006『フィールドワーク―書を持って街へ出よう』
R・エマーソン、R・フレッツ、L・ショウ著 1998『方法としてのフィールドノート―現地取材から物語作成まで』